

食用ギクのハウス早熟栽培に関する研究

2. 定植時期と栽植距離について

阿部 清・山口幸子・北川 守*・小山田光男・鈴木 洋

(山形県立園芸試験場・*山形県立砂丘地農業試験場)

Studies on the Semi-forcing Culture of Edible Chrysanthemum under Unheated Plastic Greenhouse

2. Planting time and distance

Kiyoshi ABE, Sachiko YAMAGUCHI, Mamoru KITAGAWA*, Mituo OYAMADA and Hiroshi SUZUKI

(Yamagata Prefectural Horticultural Experiment Station・*Yamagata Prefectural Sand Dune Agricultural Experiment Station)

1 は し が き

前報で、ハウス早熟栽培における保温開始期の萌芽数の多少は、収量、特に初期収量を決定することを述べた。この場合の萌芽数増加には、株当たり萌芽数及び面積当たりの萌芽数が重要になると考えられる。

本報では、萌芽数を増すための最適定植時期及び栽植距離を明らかにするために、これらの要因が、萌芽、生育、及び収量に及ぼす影響について検討した。

2 試 験 方 法

供試系統並びに栽培一般は前報に準じた。

苗の種類はさし芽苗及びうど芽苗とし、試験区は2反得で行った。

さし芽苗は、定植時期をさし芽時期より20日後の昭和57年10月22日、11月2日、及び11月12日の3回とした。各々の定植時期に、うね幅135cm、2条植の条件下で株間15, 20, 及び25cm区を設けた。ただし、11月12日の定植時期では、株間25cm区は除いた。

うど芽苗は、地下部の吸枝を約5cm長に調整後、直ちにうど芽挿しの要領で、同年11月2日、11月12日、及び11月22日の3回の定植時期を設けた。各々の定植時期には、うね幅135cm、2条植の条件下で、株間10, 15, 及び20cm区を入れた。

3 試験結果及び考察

(1) 生育

保温開始期の萌芽数は、面積当たりでは、定植時期の早い区が、また同一の定植時期間の比較では、栽植本数の多い区が、発生数が多い。前報と同様に、さし芽苗の密植区は、 m^2 当たり45本で限界に近い発生数と考えられ、さし芽苗区の10月22日及び11月2日定植時期の株間15cm区がその発生数に近い。

収穫終了時期の生育についてみると、草たけは株間の狭い区ほど高く、より密植区ほど株の競合が起こることが明

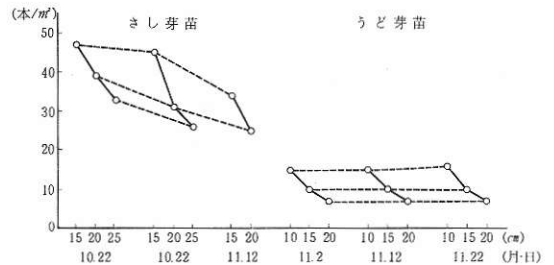


図1 定植時期及び株間の相異による保温開始期の萌芽数 (○---○定植時期, ○---○株間)

表1 生 育

		(a 当たり)									
育苗方法	定植期 (月・日)	株 間 (cm)	草 丈		側 枝 数 (×10 ³) (本)		花 数 (×10 ³) (個)		計		計
			1次 ¹⁾	2次 ²⁾	計	収 穫	未収穫 ³⁾	計	計		
さし芽苗	10.22	15	97.1	5.2	44.8	50.0	88.6	75.3	163.9		
		20	96.6	4.1	37.5	41.6	62.1	76.2	138.3		
		25	91.2	4.0	35.6	39.6	60.3	69.7	130.0		
	11.2	15	101.4	4.7	40.3	45.0	68.5	76.5	145.0		
		20	95.6	3.9	37.1	41.0	65.7	73.6	139.3		
		25	91.3	3.3	32.5	35.8	60.0	63.8	123.8		
	11.12	15	98.6	4.9	44.2	49.1	69.1	70.4	139.5		
		20	94.7	3.7	34.4	38.1	62.1	68.5	130.6		
		10	90.9	3.3	36.7	40.0	66.7	68.6	135.3		
	11.2	15	87.5	2.8	29.4	32.2	55.9	58.4	114.3		
		20	87.7	3.0	32.1	35.1	50.3	58.9	109.2		
		10	85.5	2.6	27.0	29.6	59.1	59.3	118.4		
うど芽苗	11.12	15	83.4	2.2	27.4	29.6	49.8	56.4	106.2		
		20	81.7	2.1	23.1	25.2	40.1	50.3	90.4		
		10	85.6	1.9	24.4	26.3	53.2	67.1	120.3		
	11.22	15	81.3	1.8	20.7	22.5	45.0	60.2	105.2		
		20	77.8	1.6	16.9	18.5	45.0	43.1	88.1		

注: 1) 株立ち数。 2) 株立ちから発生した側枝。 3) つぼみも含む。

らかである。側枝数は、1次及び2次側枝ともに、保温開始期の萌芽数と同様な傾向が認められるが、その差は少ない。

このように、さし芽苗及びうど芽苗ともに、保温開始期の萌芽数の多少は、その後の生育量に大きく影響し、総じて、発生数が多いほど、その後の生育量は増大することが明らかで、前報と同じ結果であった。

(2) 収量

総収量(重量)は側枝数に比例して高い。また、収量構成要素である花数についても、同様な傾向があった。一方

くず花(直径5 cm以下の正常花)及び障害花(奇形花及び病害花)は絶体数が少なく、処理間の有意な差は認められなかった。更に、一花重など、品質面においても、差異は認められなかった。

時期別収量についてみると、後期(6月1日～6月24日)収量では区間差は認められないが、初期(～5月10日)収量は、花数が多く、側枝数の多い区(さし芽苗の密植区)ほど高い傾向が認められた。このことは、前報で述べたように、保温開始期の萌芽数の多少によるものと考えられる。うど芽区についてもさし芽苗区と同じ結果が得られている(図表略)。

以上のことから、高収量(300 kg以上 / a)をあげる適正な生育量を確保するには、さし芽苗区の密植区(株間15 cm)が適する。それには、保温開始期の m^2 当たりの萌芽数で約45本とするのが良いと考えられる。

そのためには、さし芽苗を使用する場合の定植時期は、11月上旬までであり、栽植距離は、うね幅135 cm、2条植の条件下で、株間15 cmとするのがよい。

うど芽苗の場合は、更に密植の条件下での検討が必要である。

表2 当たりの収量($\times 10^3$)及び品質

育苗方法	定植期 (月・日)	株間 (cm)	商品花 ¹⁾		くず花 ²⁾		総計*		商品花 一花重 (g)
			個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	個数 (個)	重量 (g)	
さし芽苗	10.22	15	86.2	356.4	1.0	1.5	88.6	360.9	4.1
		20	60.2	260.6	0.4	0.9	62.1	264.4	4.3
		25	59.0	255.2	0.2	0.5	60.3	257.8	4.4
	11.2	15	67.1	287.3	0.4	0.8	68.5	290.4	4.3
		20	64.5	265.5	0.4	0.8	65.7	268.2	4.1
		25	57.7	237.8	0.7	1.9	60.0	244.3	4.2
	11.12	15	67.2	278.7	0.6	1.3	69.1	283.3	4.2
		20	64.7	247.1	0.4	0.9	62.1	249.4	3.9
		10	65.6	272.4	0.6	1.2	66.7	274.5	4.2
うど芽	11.2	15	54.5	241.4	0.5	0.7	55.9	244.3	4.5
		20	49.6	225.4	0.2	0.2	50.3	226.8	4.6
		10	57.8	240.0	0.9	1.9	59.1	243.1	4.2
	11.12	15	48.9	208.0	0.3	0.5	49.8	209.7	4.3
		20	39.3	171.8	0.7	0.7	40.1	173.5	4.4
		10	52.0	221.6	0.4	1.0	53.2	224.7	4.3
	11.22	15	44.5	185.4	0.2	0.4	45.0	186.4	4.2
		20	44.1	196.7	0.5	1.3	45.0	199.2	4.5
		10	44.1	196.7	0.5	1.3	45.0	199.2	4.5

注 * 収穫は6月24日に中止。総計は奇形花、病害花も含む。

1) 直径5 cm以上の正常花で病害のないもの。

2) 直径5 cm未満の正常花で病害のないもの。

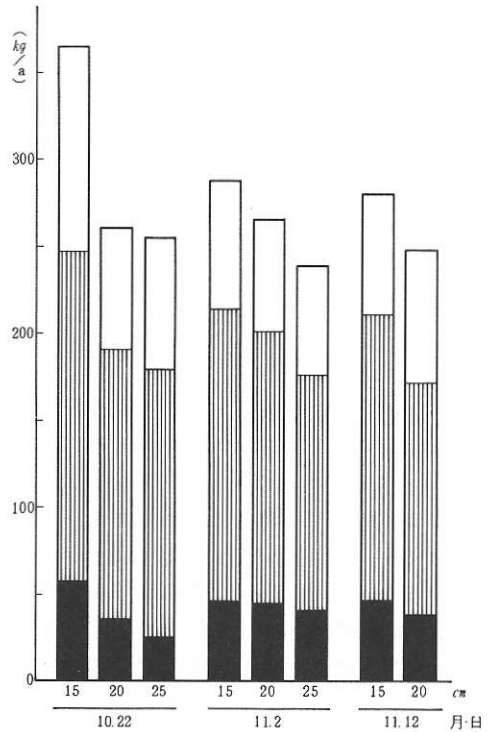


図2 さし芽苗の場合の定植時期及び株間の違いによる時期別商品花収量 (■ 初期, ▨ 中期, □ 後期)

4 ま と め

ハウス早熟栽培における定植時期と栽植距離について、さし芽苗及びうど芽苗を用いて検討した。

保温開始期の萌芽数が多いのは、定植時期の早い区及び栽植本数の多い区であった。

初期及び中期収量は、萌芽数と正の相関があり、後期収量は区間による差は認められなかった。収穫花の品質は、処理による有意な差は認められなかった。

したがって、さし芽苗の場合、11月上旬までに定植すべきで、うね幅135 cm、株間15 cmの2条植とする。